「土木行政に携わってみて」

田川県土整備事務所　技師　的野　直矢

大学４年の研究室で現場見学の一環で烏尾トンネルの工事現場を視察した。長いトンネルを掘り進めている過程を見学し、高い技術に感激したのと筑豊ラーメンがとてもおいしかった記憶があるが、まさかそこが自分の職場になるとは当時全く考えてもいなかった。田川という未知だった場所へ来て半年、この半年で土木行政について感じたことを書いてみたい。

まず働いてみて一番感じたのは、住民の方々の行政に対する期待が大きいということだ。大学、大学院と多くのワークショップに参加させてもらい、今後の土木行政において住民の民意の重要性についてはよく理解していたつもりだった。しかし、働いて半年で私がつけている苦情要望カルテは、すでに 300 件を越えようとしており、住民の県に対する要望の多さに驚いているところである。

「無駄な公共事業」とマスコミでよく公共事業が叩かれているのを耳にし、知り合いの方からも「無駄な公共事業はやめろ」と冗談で言われたりする。確かに本当に無駄な事業もあるかもしれないが、赤字路線だから「無駄」だとか、田舎に作るから「無駄」だとかいわれていることがある。私は、公共事業は全ての人に有益なように公平に行われるべきものであって大都市に住んでいる人の目線で行われるべきでないと考えている。よって前述のようなことで「無駄」だと判断するのは間違っていると思う。本当に「無駄」な公共事業をなくすためには、マスコミや周りの声に惑わされることなく現場住民の声を聞いて、住民の方が必要としていることを行っていくことが重要であると考える。そのためには、土木行政に係わる私たちは現場を大事にし、積極的に現場に出て電話だけではなく直接住民の方に会って話を聞くことが必要である。よって私は現場を大事にする職員でありたいと考えている。

今後の土木行政において現場を大事にすることの他に、「縦割り」から「横割り」の行政への移行を進めていかなければならないと感じた。実際働いてみて、住民の方がたらい回しにされている現場を見て、この「縦割り」行政を変えていかなければならないと痛感したからだ。

私は道路維持の係に所属しているのだが、県道は県、市町村道は市町村しか扱うことができない。よって市民の方が市町村道の苦情や要望をしてきても私たちには何も出来ず、市町村に要望してもらわないといけないという現状がある。これは管理上仕方がないことなのだろう。しかし住民の方に対して「県の管理ではないから市町村に言って下さい」という対応は住民の方にたらい回しにされている感を与えてしまうであろう。管理外のものでもしっかり話を聞いて、現場を確認した後に「うちでは扱えないので、市町村に伝えておきます」という対応の仕方をすれば、住民の方がたらい回しにされることも減るのでは

と考える。その為にも市町村と県のつながりを強め、交流会や勉強会等を行い、情報の共有を図っていくことで横割り行政が実現すればと思う。

最後に余談だが、私も「縦割り」「横割り」と書いたが、この「割り」という言葉があまり好きではない。同じ行政に係わるもの同士、同じ方向を向いて団結して動いていく必要があり、その集団を割るという言葉は違うのではと思う。割って行政を線的な捉え方をするのではなく、全員が同じ目的をもった面的な捉え方をしないといけないのではと思う。

今後の土木行政で求められることは、行政に携わる職員全員が目的を共有し、現場の声を聞くことでメディアなどの周りの声に惑わされない本当に必要な業務を行える能力を身につけることだと考えている。